キリストの光 光のキリスト

待降節第1主日 11月30日
（マルコ13・33―37）

かみしめながら待つ

待降節。新年の始まり。救い主はすでに来ている。わざわざ二千年前に時を巻き戻す必要はない。しかし、救い主はまだ来ていない、とも言える。

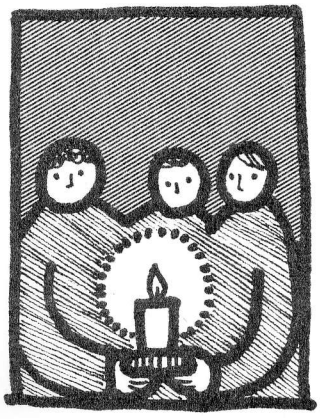
二千年前に生まれたナザレのイエスをわたしたちはキリスト、救い主と信じている。その意味で救い主は「すでに」来ている。しかし、そのイエス・キリストが「わたしの」救い主なのか…。わたしの救い主になっているのかどうか…。その意味では「まだ」来ていないと言えるのかもしれない。

今日の福音は「気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである」という。主はインマヌエル…わたしたちと共におられる神。福音の主題である。キリストは今、共におられる神。それに気づくか、気づかないか…。それによって、主が来ているのか、来ていないのか決まる。

毎年、主の降誕祭を準備する。その度にわざわざ救い主が来ていない状態に後戻りするのだろうか。降誕祭は、イエスがわたしの主、キリストになったことを祝う日。二千年前の過去一度だけの「イベント」を思い出すだけではない。あのキリストが「わたしのキリスト」になったことを祝う日。みんなで一緒に祝う日。

わたしたちそれぞれに自分のキリストの誕生の日があるだろう。それを思い起こし、一緒に祝う日が降誕祭。

だから…待降節は自分のキリストの誕生を思い起こす時。わたしにはいつ「主」が誕生したのだろうか。自分の今日までの人生を振り返り、「主」の誕生の「時」に気づき、その喜びをみんなで一緒に降誕祭に爆発させる。



待降節や四旬節になると気分が暗くなる。聖堂が紫

色で染められると気持ちが暗くなる…。すでに喜びの中に包まれているのに、なぜか暗い気持ちになる。そうならなければならないような気にさえなる。「回心して福音を信じなさい」という呼び掛けにも暗い気持ちになる。思い出すのは自分の罪と、それを犯した日々…。しかも、それを待降節の間、ずっと思い、できるだけ降誕祭が近づいた時に告白し、ゆるしを求める気風がある。

「回心」とは神に心を向けること。自分のところに来てくれた神に気づくこと。こんなわたしに！と気づく時、喜びがわいてくる。喜びを抑えて待つことはできない。わざわざ暗い気持ちになる必要はない。じっくりと喜びをかみしめればいい。じっくりとじっくりと…。そうすれば、主の再臨が待ち遠しくなり、自分の死さえも乗り越えることができるだろう。

ことしもこころから「よかったね、よかったね」と喜びを交わす降誕祭を迎えたい。

（山口元眞＝福岡教区司祭／カット＝高崎紀子）

今週の福音

12月

1日・月 マタイ 8・5―11
2日・火 ルカ 10・21―24
3日・水 マルコ 16・15―20
4日・木 マタイ 7・21、24―27
5日・金 マタイ 9・27―31
6日・土 マタイ 9・35～10・1、5a、6―8